# マイクロアグレッションにおける前反省的な敵意について

## サルトルの現象学的他者論を手がかりに

赤木　優希

## 1. はじめに

本稿の主題は、「マイクロアグレッション（microaggression）」の定義を整理しつつ、その構造を解明するために、前反省的な敵意に注目することの重要性を明らかにし、現象学的他者論がそれに対する有効な分析視角の一つであることを示すことである。

現代において、世界の様々な場所で、依然として無数の差別や不平等が存在している。そのなかでも対処が困難な差別の形態として挙げられるのが、マイクロアグレッションである。詳しい定義については後述するが、典型例を挙げるならば以下である。職場で、「女性でも頑張れば正当に評価されます」と言われるとき、その発話者は、自分では男女平等を支持していると思いこんでいるにもかかわらず、実際には男性以上に頑張らなければ評価されないものとして女性を捉えているという、差別的なジェンダー観を発露させている。こうした差別は発話者が自覚せずに行なっているため、主題化されづらく、改善することも難しい。

このような問題に取り組むためには、マイクロアグレッションがどのように形成されるのかを、構造的に解き明かす必要がある。しかし、先行研究において、そうした構造に関する理解はまだ定まっておらず、十分な検討が尽くされているとは言い難い。それに対して本稿では、その構造を明らかにするために、マイクロアグレッションにおいて典型的な現象として、発話者の意識に先行する敵意に注目することが必要である、と考え、そうした敵意を「前反省的敵意」と呼称する。マイクロアグレッションにおける前反省的敵意の機能を明らかにし、それに対する有効なアプローチを検討することによって、今後の研究が向かうべき道筋を展望することが、本稿の目的である。

以下では次のように議論を展開させていく。まず、マイクロアグレッションの概要を確認し（2）、先行研究におけるマイクロアグレッション概念の構造的解明の試みを整理する（3）。その上で、こうした先行研究の問題点を検討し（4）、その不足を補うために、現象学的他者論を分析視角とした、前反省的敵意に関する素描的考察を展開しつつ、今後の課題を提示する（5）。

## 2. マイクロアグレッションとは何か

「マイクロアグレッション」は、1970 年代に精神科医であるピアースによって作られた造語で

ある（Pierce 1970）。彼は、黒人と白人のコミュニケーションのなかで、白人が意図の有無を問わずに行う「けなし」があることに注目し、その現象を「マイクロアグレッション」と名付けた。従来の差別と異なる点は、それが無自覚に差別的・否定的な言動をとるということである。もっとも、ピアース自身はこの概念を必ずしも厳密に定義しているわけではない。

「マイクロアグレッション」の定義を確認するのに先立って、この言葉がどのような含意を持つかを検討しておこう。「マイクロアグレッション」の「マイクロ（micro）」とは、量を表す単位につける接頭語であり、$10^{-6}$ 倍のことである。例えば、長さを表す場合、$1\times10^{-6}$m は 1 マイクロメートルと表される。こうした数学的な用法から転じて、一般名詞の接頭辞として用いられることで、「微小な」、「小さい」といった含意を持つ。また「アグレッション（aggression）」とは、主に正当な理由のない、敵意に基づいた侵略や攻撃という意味で使用される。したがって「マイクロアグレッション」とは、「小さな攻撃」あるいは「微小な敵意」などと訳すことができる。しかし、丸一（2022）によれば、マイクロアグレッションの「マイクロ」は「生態学的システム理論」[1]における用語として理解されるべきであり、政治や経済などのマクロな領域に対して、家族や友人などにおける日常的な領域を指すものとして捉えられる。そのためマイクロアグレッションはさしあたり、「日常における敵意ある攻撃」を想起させる語彙である、と考えることができる。

## 3. 先行研究におけるマイクロアグレッションの定義

金（2016）によれば、ある差別がマクロであるかマイクロであるか、という差異は、それが可視的であるか否かによって説明される。すなわちマイクロアグレッションとは、見えにくく、「非可視的」なほどに「非常に小さな言動」による差別を指す。一方で、青木（2022）によれば、マクロかマイクロかを隔てているのは、当事者の人数の多寡である。すなわち、国家の規模で行われる差別はマクロであるが、家族や友人などの限られた人間関係のなかで行われる差別は、マイクロアグレッションと呼ばれる。

またリニ（2020）によれば、マイクロアグレッションは、被害者が抑圧的な状況で不当な扱いを受けた可能性を感じつつ、確信を持てない経験として表現される。つまり、ある出来事がマイクロアグレッションとみなされるかどうかは、あくまで個々の被害者の認識によって――しかもその認識が曖昧さを伴った不明瞭なものであることによって――決定されるのだ。それに対して、被害者が不当な扱いを受けたことを明瞭に意識できる場合には、その差別は「ヘイトクライム」と呼ばれる。

さらにスーはマイクロアグレッションを次のように定義している。

---

[1] 発達心理学者ユリー・ブロンフェンブレナーの提唱した理論である。「マイクロ–マクロ」という領域を指す。（丸一 2022）

マイクロアグレッションというのは、ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のことである。（スー 2020, p. 34）

スーは、このように説明されるマイクロアグレションの具体例として、“病院の診察室において、高齢者の健康問題について、子どもに対して話をすること”や“初対面で高齢者に大声で話しかけること”などを挙げている。こうした行動は、その高齢者の能力を低いとみなす態度の表明に他ならず、敵意ある否定的な表現に該当するからだ。

以上のような定義を総合すれば、マイクロアグレッションとは、プライベートな領域における、不可視性と非明示性を併せもった差別として理解することができる。

マイクロアグレッションは、その被害者に対して、極めて深刻なダメージを与える。丸一（2022）も指摘するように、常習的にマイクロアグレッションを受け続けることで、被害者には自尊心の低下だけではなく、不安症状やうつ症状、心臓疾患や記憶力の低下などの、健康被害が生じることが明らかになっている。また被害者の認知的な能力にも影響がある。露骨な差別を受けた場合よりも、被害者の記憶力や集中力を測るテストのスコアが低下することが報告されており、学業や仕事のパフォーマンスにもネガティブな影響を生じる可能性もある。当然のことながら、雇用や福祉へと平等にアクセスする機会を損なわれることになるなどの、複合的な人権侵害をも併発する。

スーはマイクロアグレッションを大きく分けて三つに区分する。すなわち、①マイクロアサルト、②マイクロインサルト、③マイクロインバリデーションである。以下では、それらを順に確認していこう。

## 3.1. マイクロアサルト

マイクロアサルトとは、「環境に埋め込まれたサインや言語、または行為によって、周縁化された人びとに伝えられる人種、ジェンダー、性的指向に対する偏った態度や信念、行為のこと」（スー 2020, p. 69）である。これは「かすかなものであれあからさまなものであれ、意識的かつ意図的なもの」（ibid., p. 69）であり、「ある人のグループアイデンティティを攻撃したり、名前の呼び方や忌避的な行動、目的を持った差別的な行動を通して傷つけたり害したりしようとすること」（ibid., p. 69）である。

マイクロアサルトには、環境的なものと、言語的なものが区別される。環境的な例として、KKK のずきんやナチスのかぎ十字、アメリカ南北戦争時代の南部同盟の旗を飾ること、十字架を燃すこと、男性経営者のオフィスにバニーガールのポスターが貼られていること、があり、これらはすべて環境的なマイクロアサルトを構成する要因である。これらの行為は、ある特定

のグループや個人に対して、脅迫や威圧を与えることがある。そしてそれは、周縁化された人々に対して、「この社会において下等であり、人間以下であり、劣った存在であり、他者とは同じレベルに属していないために、求められておらず、安全ではない」（ibid., p. 71）と感じさせる。

また、言語的な例として、アフリカ系アメリカ人に「ニガー」、日系アメリカ人に「ジャップ」、女性に「ビッチ」や「カンツ」、同性愛者に対して「ホモ」と軽視の言葉を使って呼ぶことが含まれる。上記の例でもわかることであるが、これは明らかに露骨な敵意の意思表示であり、マイクロアサルトは、他のマイクロアグレッションと比べて、被害者が明確に「これは差別だ」と感じやすい。上記の「ジャップ」や「ニガー」といった発言が典型的にそうであるが、これは「古典的」と言われる差別行為と非常に似ている。それゆえ、現在は社会的批判を受けやすい差別行為でもある。そのため、マイクロアサルトは、加害者の匿名性が確保される場合や、加害者と同じ考えを持つ人々が一緒にいる場合、加害者が自制心を失った場合などに行われる傾向にある。

## 3.2. マイクロインサルト

マイクロインサルトは、「やりとりや環境に埋め込まれた形をとり、ステレオタイプや無礼さ、無神経さを伝えるコミュニケーションのこと」であり、「ある人の人種、ジェンダー、性的指向、境遇、アイデンティティを侮辱する」（ibid., p. 75）という特徴がある。

スーは、マイクロインサルトに以下の六つの事例を挙げている。第一に、「知的能力を出自に帰する」こと（男性教師が女子学生の数学の能力に驚く、白人学生がアジア系アメリカ人に数学や理科の問題を手伝うように頼む、など）、第二に「二級市民」として扱うこと（レストランで黒人の客が忙しない厨房のドア近くの席に案内される、女性の医者が男性の患者から看護師と間違われる、など）、第三に「異文化の価値観やコミュニケーションスタイルを病的なものとして扱う」こと（白人、男性、ストレートのグループの文化的価値観やコミュニケーションが社会規範であるという信念、黒人に対して声の大きさや感情的であること、活発であることを言う）、第四に「犯罪者もしくは犯罪者予備軍と決めてかかる」こと（白人女性がラテン系アメリカ人をみてハンドバッグを持つ力を強める、小切手と現金を引き換えるとき黒人に対して白人よりも多くの身分証明書を要求する、など）、第五に「性的なモノ扱い」をすること（女性が人間性と人間としての基本要素の統合を剥ぎ取られ、男性にとって「モノ」扱いされること、白人男性がしばしばアジア系アメリカ人女性が女らしくて従順だと魅力を感じる、など）、第六に「異常者扱い」されること（ゲイ男性が内科検診に行くと初心の内科医から HIV やエイズと疑われる、風変わりや協調的でない同級生の振る舞いを表現するときに「ゲイ」と言う用語を使う、レズビアンが一対一の恋愛関係にあることに驚く、など）である（ibid., pp. 75-78）。

## 3.3. マイクロインバリデーション

マイクロインバリデーションは、「特定のグループの人々の心の動きや感情、経験的なリアリティなどを無視したり、否定したり、無価値なものとして扱ったりするコミュニケーションや環境の中のサイン」（ibid., p. 78）によって特徴づけられる。スーは、マイクロインバリデーションの大きな事例を四つ挙げている。

第一に「よそもの扱い」である。アジア系アメリカ人が英語を話すと「上手だ」と褒められたり、生まれがどこかをしつこく尋ねられたりすることは、「あなたはアメリカ人ではなくよそ者である」と言うメタコミュニケーションの表れである（ibid., p. 79）。

第二に「人種、ジェンダー、性的指向を見ない」ことである。「君と接するとき、私は君の人種などを見てはいない」と言う発言や「人類のるつぼ」という言葉は、受け手に対して、人種に関する話題を議論や会話に持ち込まないことを暗に要求する（ibid., pp. 79-80）。また、それは、有色人種は同化や変容をするべきだと表明することでもある。さらに、これらの発言は、自身がレイシストとして見られないように意図されたものでもあるのだ。スーは、このようなカラーブラインドの態度について、「人種を否認することは、実は、違いを否認することであると断定している。（中略）レイシズムを否認することは、実は、レイシズムに立ち向かって行動することの必要性を否認することである。」（ibid., p. 80）と述べ、この態度の周縁化された人々への暴力性を強調している。

第三に「個人がもつレイシズム／性差別主義／異性愛主義の否認」（ibid., p. 80）である。「ゲイの友達がいるのだから同性愛嫌悪ではない」「異種人種間結婚には反対していない、ただ子どもたちのことが心配なだけだ」「雇用主として、すべての男性と女性を平等に扱います」などの発言は、「異性愛主義に毒されるはずがない」「異人種間で関係を結ぶことに躊躇するのは子どもたちの心配をしているだけであり、決して個人的な偏見によるものではない」「女性差別などするはずがない」などのメッセージが隠されている。これらは、相手の人種やジェンダーに関するリアリティを否認することになる（ibid., pp. 80-81）。

第四に「能力主義信仰」（ibid., p. 81）である。これは、人種やジェンダー、性的指向は人生を成功させる上で何も影響しないと主張する事例だ。有色人種の人々は、個人や組織、社会のレイシズムによって、失業率の高さ、学歴の低さ、貧困などが引き起こされることが往々にしてある。しかし、「すべてのグループは成功する機会を平等に与えられている」という平等の価値観の元では、人生がうまくいった人は、その人の個人的な努力によるものであり、うまくいかない人は、その人に何か欠陥があるからだとみなされる。成功も失敗も、知的能力や努力、モチベーションや家族の価値観といった個人の特性の結果ということになる。例として、「最良のものが頂点に昇る」「アファーマティブアクションは逆レイシズムだ」といった発言は、レイシズムや性差別主義、異性愛主義がグループや個人の成功に大した影響を与えることはな

いといった能力主義信仰の現れであろう（ibid., p. 81）。

このマイクロインバリデーションは、三種類のマイクロアグレッションのなかで、最もダメージが大きくなる可能性がある。これは、人種、ジェンダー、性的指向に関わるリアリティを直接的かつ陰険に否定し、周縁化された人々にリアリティを押し付け、抑圧するからだと言われている（ibid., p. 79）。

## 4. 前反省的敵意に対する現象学的分析の必要性

これまで、先行研究におけるマイクロアグレッション形成過程の構造的解明の試みの概観、整理を行ってきた。しかし、筆者は、これらの試みでは依然として十分に説明することができない側面がある、と考えている。それは、マイクロアグレッションの不可視性が根差している、加害者における敵意の無自覚さである。先行研究において、そうした不可視性としてのマイクロさは、その差別が発生する場面が日常であることや、その差別に関わる人々の数が限られていることから説明されてきた。しかし、それらはいずれも、この差別が不可視であること自体を説明する理由にはなっていない。むしろマイクロアグレッションの不可視性の根拠は、差別をしている加害者自身が、自らの差別性を自覚していない、という点にあるのではないだろうか。

様々な差別の形態が存在するなかで、マイクロアグレッションの独自性は、無自覚に敵意がないままに差別が行われる、という点にある。同時にそれは、マイクロアグレッションの具体的な課題の解決を困難にする、根本的な要因であるようにも考えられる。なぜなら、加害者が敵意を自覚していないなら、自分が敵意を有していること自体を認めることができず、自らの行動を改善する動機を得ることもできないからだ。したがって、マイクロアグレッションの本質的な特徴を明らかにするためには、このように意識によって主題化される以前の敵意、すなわち前反省的な敵意について、その構造を解明する必要がある。ただし、それは普通に思われているよりもはるかに錯綜したものであることが予想される。リニ（2020）によれば、マイクロアグレッションの成立要件として決定的に重要な要素は、被害者の個人的な体験である。しかし、その体験のなかで加害者の敵意がどのように位置づけられるのか、ということは、必ずしも一意に確定することができない。それらを分節化するならば、そこにはさしあたり、次のような複数の可能性が開かれている。

第一に、加害者が敵意を自覚しており、被害者がそれを敵意として認識しているケースである。この場合には、マイクロアグレッションはヘイトクライムの現象と接近していくことになる。第二に、加害者が被害者へと向けられた敵意を自覚していないが、しかし実際には敵意を持っており、被害者がそれを敵意として認識しているケースである。この場合、加害者は自分でも知らぬ間に敵意を抱いているため、加害者自身にそのマイクロアグレッションの加害性を自覚させることは困難である。さらに、第三に、加害者が被害者へと向けられた敵意を持って

いないにもかかわらず、被害者が、加害者からの敵意を認識する、というケースも考えられる。この場合、被害者は実際には存在しない敵意を加害者から向けられていると認識することになる。加えて、第四に、加害者が被害者以外の第三者に敵意を向けているにもかかわらず、被害者がその敵意を自分に向けられたものとして認識する場合である。このとき、加害者は自分がマイクロアグレッションの加害者であるということを、まったく受け入れられないに違いない。

リニの定義に従うなら、以上のケースは、すべてマイクロアグレッションとして成立しうるものである。しかし、どのケースを念頭に置くかによって、加害者と被害者の関係はまったく違ったものになるだろう。第三のケースの場合、そもそも加害者を加害者として定義することが適切であるかということすら、定かではない。また、第二のケースと第三のケースをどのように区別し、具体的な事例がどちらであるのかを認定することも、困難である。

このような問題を解決するために、取り組まれるべき課題は、大きく分けて二つある。第一に、そもそも敵意を抱くということはどのようにして起こるのか、そのメカニズムを明らかにすることであり、第二に、他者の敵意を「私」がどのように体験するのか、言い換えるなら、他者の敵意がどのように現象的に立ち現れるのかを解明することである。

このような観点に立つとき、そうした問いに取り組むための有効なアプローチであると考えられるのが、現象学的他者論である。村上（2019）によれば、現象学とは、「目に見えない動きが持つ形を、その運動の内側に視点をとって捕まえること」である。また、その枠組みのなかで論じられる他者論は、サルトル（2007）が指摘するように、「私の存在のすべての構造を完全にとらえるためには、私は他者を必要とする」という特徴を帯びる。こうした独自性をもつ現象学的他者論の方法論を取ることによって、他者への前反省的な敵意の構造を明らかにすることは、マイクロアグレッションという現象を理論的に理解するために、不可欠の作業になるはずである。

## 5. サルトルの前反省的敵意に関する素描的考察

このような観点において、特に重視するべきであると考えられるのは、20 世紀フランスの哲学者サルトルの主著『存在と無』における他者論である。以下では、サルトルの他者論を参照しながら、それがマイクロアグレッションにおける前反省的敵意の考察において、どのように寄与しうるのかを、一つの素描的考察として展開してみたい。

サルトルは同書のなかで、他者からの「まなざし」を前にした人間が、いかにしてその脅威に抵抗し、結果として不安定な人間関係を作り上げることになるのかを論じている。彼によれば、自己が他者の「まなざし」を前にして取る「原初的な態度」の一つが、「憎悪」である。そしてそれは、それが「原初的」である以上、意識に先行する非主題的な他者への態度である。またそれは、筆者の問題関心に従うなら、まさにマイクロアグレッションにおける前反省的な敵意と重なり合うものである。よって、マイクロアグレッションにおける前反省的な敵意が形

成される構造を、サルトルの他者論を手掛かりにして考察することができるだろう。[2]

## 5.1. 『存在と無』におけるサルトルの他者論

サルトルの他者論は、「対自存在（être-pour-soi）」と「即自存在（être-en-soi）」という二つの対立する概念を軸にしながら議論が展開される。「対自存在」とは、「それがそれであらぬところのものであり、それであるところのものであらぬ」(サルトル Ⅰ, p. 233)ものとして説明される、人間の存在のあり方である。サルトルによれば、それがあるところのものとは本質に他ならない。しかし人間はいかなる本質によっても規定されず、「投企」によって自己を創出する存在である。これに対して「即自存在」は、「それがあるところのもの」(ibid.,, p. 65)として説明される、本質によって規定された存在のあり方である。その典型例として挙げられるのが、道具だ。たとえばコップや椅子は、その用途がすでに規定されている存在者であり、その意味において即自存在である。このとき対自存在と即自存在は、事物を認識する主体（対自存在）と、その主体に事物として認識される対象（即自存在）という関係にある。

対自存在として存在する人間は、いかなる本質にも規定されないという意味で、自由である。対自存在の自由は、即自存在であるところの事物を対象化し、超越する。しかしその自由は、自分がそれ自体としては何者でもない、自分が存在することにはいかなる理由もない、という不安を喚起させもする。サルトルは次のように述べる。

> 人間は自己の本質についての判断以前的な了解をつねにたずさえているが、まさにこの事実によって、人間は一つの無によって自己の本質から引き離されている。本質とは、人間存在が自己自身について、あったものとしてとらえるすべてである。ここにおいて、不安は、あるところのものからの不断の離脱という仕方で自己が存在する限りで、あるいはむしろ、かかるものとして自己が自己を存在せしめる限りで、自己の把握としてあらわれる。(ibid., pp. 145-146)

サルトルによれば、人間は常に自らの本質に関する「判断以前的な了解」を有している。それは、言い換えるなら、主題的に意識することなく、自分がどのような存在であるかを了解している、ということである。しかし、人間は対自存在である以上、そうした本質によっては規定されていない。したがって人間はそうした了解から「離脱」し続ける。そうした仕方で自己を把握させる気分こそが、不安に他ならない。

ただし、このように対自存在であるところの人間が、その自由を失うという事態が起こりえる。それが、自分以外の対自存在、すなわち他者に遭遇したときである。

「私」が他者を他者として了解できるのはどのようなときだろうか。それは、他者が「私」と

[2]『存在と無』からの引用については、著者名とともに邦訳の巻数を明記し、その後にページ数を示す。

同じように対自存在であることを、「私」が了解できるときである。そのときその他者もまた、「私」と同じように、即自存在を超越する自由を有している――すなわち即自存在を対象として認識することができる。サルトルによれば、そうした他者の自由を「私」が経験するのは、「私」が他者の認識の対象とされるとき、つまり他者が「私」に「まなざし（regard）」を向けるときである。そのとき「私」は、その他者によって対象化され、即自存在になる。すなわち対自存在であったはずの「私」は、即自存在へと変容してしまうのだ。

サルトルは、そうした「まなざし」の経験を、次のような例によって説明している。「私」が、誰もいない廊下に一人でおり、ある部屋の鍵穴を覗いている。すると誰もいなかったはずの廊下に人が現れ、鍵穴を覗く「私」をまなざすのである。「私」は、他者が「私」を見たとおりに「私」が存在していることを自認し、羞恥する。他者からのまなざしによって、「私」は「真に、扉のところで盗み聞きをしつつあるもの」(サルトル Ⅱ, p. 110)でしかなくなる。「私」は、一人でいるときには対自存在であり、様々な可能性に開かれた自由な存在だった。しかし、他者の「まなざし」を向けられた瞬間に、そうした可能性は閉ざされ、「扉のところで盗み聞きをしつつあるもの」以外の何者でもなくなってしまう。それによって、対自存在だった「私」は即自存在へと変容する。そのとき「私」は、自らの自由が崩壊することを感じるのである。

このように、他者によって「私」が即自存在へと変容する出来事を、サルトルは「他有化（aliénation）」(ibid., p. 175)と呼ぶ。他者に他有化されるとき、「私」は羞恥を経験する。この羞恥が意味する事態を、サルトルは次のように分析している。

> 純粋な羞恥は、これこれの非難されるべき対象であるという感情ではなくて、むしろ、一般に、一つの対象であるという感情であり、私が対象にとってそれであるところのこの存在、下落した、依存的な、凝固したこの存在の内に、私の姿を認めるときの感情である。羞恥は、根源的な失墜（chute originelle）の感情である。しかもそれは、私がこれこれのあやまちをおかしたであろうという事実から由来するのではなく、ただ単に、私が世界のなかに、もろもろの事実のただなかに、《落ちた》という事実、そして私があるところのものであるためには、私が他者の仲介を必要とするという事実から、由来するのである。(ibid., p.184)

サルトルによれば、羞恥とは、対自存在として即自存在からなる事物を超越していたはずの自己が、他者にとっての「一つの対象」へと凝固されるときの、「根源的な失墜の感情」である。ここで注意するべきことは、「失墜」が、即自存在へと変容したことだけではなく、それによって自己が様々な事物のなかの「一つ」になったということ、そしてその帰結として、自己の絶対性が失われたことに由来する、ということだ。「まなざし」の脅威は、それが「私」の自由を失わせるということだけにあるのではなく、それによって自己が、「もろもろの事実のただなか」にある、内世界的存在者の一つへと相対化されてしまう、という点にも存するので

ある。

以上のように、他者の「まなざし」は「私」から自由を奪い、その価値を失墜させる。「私」はそうした脅威に対して抵抗を試みる。サルトルはそうした抵抗のうちに、「私」の他者に対する「最も原初的な諸関係」(ibid., p. 361)を洞察し、その態度を二つに区分する。

第一に、他者の自由を自分のものにしようとする態度であり、第二に、他者の自由を否定しようとする態度である。第一の態度は、他者が自由であることを否定しないのに対して、第二の態度は、あくまでも「私」の自由を回復し、他者から自由を喪失させることを目指すのだ。第一の態度として挙げられるのは愛とマゾヒズムであるが、サルトルによればそれは必然的に挫折に至り、自己は第二の態度へと促される。その第二の態度として挙げられるのは、無関心・性的欲望・サディズム・憎悪である。

この四つの態度は、すべて、他者の自由を否定しようとする点で共通する。しかし、どのようにしてそうした否定を試みるのかは、大きく異なっている。無関心は他者が自由であることをそもそも認めない。性的欲望とサディズムは、それぞれ、ともに他者の自由を所有しようとする試みであり、他者の身体を肉体（chair）へと受肉させようとする。両者の違いは、その仕方にある。性的欲望が受肉を愛撫によって試みるのに対して、サディズムはこれを暴力によって試みる。前者において、受肉させようとする自己自身も受肉するのに対して、後者において、自己は決して受肉しようとはしない。この意味で性的欲望には相互性が存するが、サディズムは非相互的である。そして憎悪について、サルトルは以下のように述べている。

> 憎悪は一つの根本的な諦めを含んでいる。つまり、この対自は、他人との何らかの合一を実現しようとする意図を放棄する。この対自は、自分の即自存在をとりもどすために他人を用具として利用することなどは、断念する。この対自は、ただひたすら、事実的限界をもたない一つの自由を、ふたたび見いだそうとする。いいかえれば、この対自は、とらえられない自分の「対他-対象-存在」を除去し、自分の他有化的な次元を廃止しようとする。それはつまり、他人の存在しない一つの世界を実現しようと企てるのも同然である。憎悪する対自は、もはや対自でしかあらぬことを承諾する。(ibid., p. 482)

対自存在である「私」は今まで、他者に奪われた自由と同化しようとしたり、その自由を否定し壊そうとしたりしてきた。しかし、対自存在は他者との関係において、相剋と循環からは逃れられない。他者に対して、「私」は何をしても「罪責ある者」(ibid., p. 489) [3] になる。そし

---

3「「私」が」「罪責ある者」であるのは他者の面前である。第一に、他者から向けられるまなざしによって、「私」が他有化されることを、引き受けなければならないという状況を体験する時に、「私」は「罪責ある者」である。第二に、「私」が他者にまなざしを向ける時に、「私」の「まなざし」という自己主張によって、他者を対象として構成する。そして、「私が」、他者にその他有化を引き受ける状況を強いることになる。それゆえ、「罪責ある者」の原罪とは、「他人の存在している一つの世界のなかへの私の出現」（サルトル II, p. 48)

て「私」は、ついにそのすべての試みを放棄する。「私」は、他者を愛することも、他者の自由を屈服させるためサディズムに走ることもしない。他者から他有化されることを拒むために、他有化されるに至る一切の過程を拒むのである。

筆者は、上記で述べた「憎悪」が、マイクロアグレッションの持つ前反省的な敵意を説明するにあたって有効な分析視角になると考える。サルトルは、他者の「まなざし」による他有化の拒否として、意識に昇らない敵意を説明している。「まなざし」による他有化の拒否とは、人間存在の他者への根本的な態度として説明されている。したがって憎悪とはサルトルにとって、主題的に意識されるよりも前に、人間を飲み込んでいるものである。ここから、マイクロアグレッションが発生する構造を、「まなざし」による他有化の拒否として考えることができれば、前反省的敵意の構造に対する理論的な説明が可能になるのではないだろうか。[4]

現代思想において、こうしたサルトルの現象学的他者論は、ジュディス・バトラー、フランツ・ファノン、ヘレン・ンゴなど、社会的な差別に対する哲学的な考察において、その分析視角として、しばしば援用されてきた。そうしたなかでも、前反省的な敵意に対する理論的な基礎を説明しうる点において、特にそれは、マイクロアグレッションの分析にとって重要な役割を演じることになると考えられる。もちろん、サルトルの『存在と無』の議論をそのまま現実のマイクロアグレッションの課題に適用することはできないだろう。ここでは、彼の理論が、マイクロアグレッションの構造を解明するための理論的な枠組みとして重要性を持つ、という点を示唆するにとどめたい。

## 6. おわりに

以上において本稿では、先行研究におけるマイクロアグレッションの定義について検討してきた。改めて、本稿の議論を次のように整理しておきたい。

マイクロアグレッションとは、日常生活における無自覚の差別的言動であり、1970 年代に精神科医のピアースが命名した。この差別形態は、発話者が意識していないために対処が困難であり、ジェンダーや人種、性的指向など様々な側面で現れることがある。

その定義には様々な解釈があるが、スーの研究が最も体系的にマイクロアグレッションを定義づけしていると考えられる。マイクロアグレッションは、日常の中で見られる、無自覚的または自覚的に特定の人々や集団に対して、差別的な言動や行動を通じて、敵意や軽蔑を示す表

---

である。

[4] 『存在と無』において、敵意は他者の「まなざし」に対する根源的な態度の一つとして説明される。それは、日常生活の場面では、様々な派生的形態をとって立ち現れるのであり、マイクロアグレッションもまたその一つとして理解することができる。言い換えるなら、マイクロアグレッションの根源的な構造は、他者への前反省的な態度として説明されるのであり、そのような見方を取ることで、その構造はより見通しやすくなるのである。

現であり、具体例として、高齢者に対する無礼な対応や、アジア系アメリカ人に対する「本当の出身はどこなの」との発言などが挙げられる。

またスーはマイクロアグレッションを三つのカテゴリーに分類している。(1) マイクロアサルト、(2) マイクロインサルト、(3) マイクロインバリデーションである。マイクロアサルトは意図的な差別行動、マイクロインサルトは無神経なコミュニケーション、マイクロインバリデーションは特定のグループの経験や感情を無視する行動を指す。これらの無自覚の差別行動は、被害者に深刻な心理的影響を及ぼし、自尊心の低下や健康被害を引き起こし、また、社会全体にマクロな影響を与えることもある。

こうした無自覚の差別を理解するためには、その構造を明らかにする必要があるが、先行研究では統一的な見解が見られていない。そこで本稿は、前反省的敵意の重要性を明らかにし、それを解明するための方法論として、現象学的他者論の有効性を指摘した。その上で、その素描的考察として、サルトルの他者論、主に「まなざし」による他有化の拒否である「憎悪」をめぐる分析が、有効な手掛かりになると考えられると示唆した。

それでは、こうしたサルトルの現象学的他者論は、バトラー、ファノン、ンゴらを始めとする、現代の差別をめぐる思想のなかで、どのように論じられてきたのか。また、その理論は、マイクロアグレッションの現実の課題を分析する上で、どのような意義と制約を有し、それによって、マイクロアグレッションのどのような側面に光を当てることができるのだろうか。それらを今後の筆者の課題として提示しつつ、本稿は紙幅の制約のため、ここで筆を置きたい。

## 参考文献


青木香代子（2022）「大学における社会正義のための教育の授業開発―マイクロアグレッションを例にして―」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』第 6 号, pp. 49-66.

金友子（2016）「マイクロアグレッション概念の射程」『立命館大学生存学研究センター報告』24, pp. 105-123.

丸一俊介（2022）「心理支援の現場から見るマイクロアグレッション：在日コリアンカウンセリング＆コミュニティセンターの歩みから」『現代思想』青土社, 第 50 巻第 5 号, pp.186-194.

村上靖彦（2019）「哲学と質的研究：現象学的な質的研究の役割と位置づけについて」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』45 号, pp. 1-18.

ジャン＝ポール・サルトル（2007）『存在と無：現象学的存在論の試み』Ⅰ-Ⅲ, 松波信三郎訳, 筑摩書房.

デラルド・ウィン・スー (2020)『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイクロアグレッションに向けられる無意識の差別』マイクロアグレッション研究会訳, 明石書店.

Pierce, C.（1970）. Offensive Mechanisms. In F. Barbour（Ed.）,*The Black Seventies* (pp. 265-282). Porter Sargeant（Boston）.

Rini, R.（2020）. Taking the Measure of Microaggression: How to Put Boundary on a Nebulous

Concept. In L. Freeman and J. W. Schroer（Eds.）, *Microaggressions and Philosophy* （pp. 101-120）. Routledge（N.Y.）